

国内外の批判を浴びながら、東電がトリチウム汚染水の海洋放出を始めてから1年になる。予想通り、海洋放出で汚染水の問題解決の見通しは何一つ見えない。この1年間に海洋放出した汚染水の量は、合計7回、54,734 m<sup>3</sup>（トリチウム量：8.6兆Bq）だが、現在も毎日、新たな汚染水100 m<sup>3</sup>が発生し続けている結果、実際に減少した汚染水の量は2.8万m<sup>3</sup>（放出量の半分）に過ぎず、現在（8月1日）も131.2万m<sup>3</sup>がタンクに貯蔵されている。放出トリチウム量ではこの1年間に8.6兆Bq放出したが、今なを860兆Bq保管されており、このままでは全量放出までに100年以上かかる。国と東電、原子力村の無責任を問う。

### トリチウム汚染水は処理出来る

この連載で既に何度も述べた事だが、トリチウム汚染水は処理出来る。東電や国は処理技術がないので海洋放出しかないと主張するがそれは嘘である。軽水とトリチウム水の化学的性質は同じでALPS等では分離できないが、物理的性質の違いを利用すれば処理出来る。既に沢山の実験や論文が描かれており政府と東電にも提案されている。にもかかわらず、国と東電はそれらを無視している。なぜか？膨大なコストが必要だからである。だがこれまでの様々な提案を見れば、現在の汚染水を千倍程度に濃縮し、タンク一個程度に収めるには数百億円～千億円程度で済む事が分かっている。海洋放出にかかる費用とほぼ同じである。それを安全に長期間管理する事は現実的選択である。では、何故国や東電は汚染水処理を行わないのか。表向きトリチウムは海に捨てても安全だから、という。ならば何故100年もかけて海洋放出するのか。

### 六ヶ所再処理工場のトリチウム汚染水

海洋放出の本音は別のところにある。計画から既に30年以上経つが度重なるトラブル続きで、六ヶ所再処理工場は未だに見通しが立たない。仮に、本格稼働すれば高レベル放射性廃棄物の処分は具体的問題になる。高レベル廃棄物処分場は勿論決まっていない。問題は、使用済み核燃料再処理で発生するトリチウム汚染水である。計画によれば、本格稼働で発生するトリチウム汚染水は現在の福島原発で貯蔵中の20倍の量が毎年発生し、それを海洋放出する事になっている。青森県や東北・関東の人々はこの計画を知らないのだろうか。現在、福島で貯蔵されている汚染水を処理すれば、当然、六ヶ所で発生する汚染水も処理せざるを

得なくなる。勿論、コスト的に出来るはずがない。福島島の汚染水海洋放出は六ヶ所再処理工場運転のための前例作りである。

### 破綻した核燃料サイクル

原発の使用済み燃料からプルトニウムを取り出し高速増殖炉の燃料にする、それによって燃えないウラン238を核燃料に利用出来る、というのが核燃料サイクルの夢で、その本丸が核燃料再処理工場である。だがこの夢は世界的にも破綻した。世界で再処理工場を稼働させたのはイギリスのセラフィールドとフランスのラ・アークだが、どちらも経済的に割に合わず閉鎖を余儀なくされた。高速増殖炉は日本の「もんじゅ」が1995年にナトリウム火災で失敗し廃炉に追い込まれた。アメリカは当初から核燃料サイクルを目指していない。世界的に破綻した「核燃料サイクルの夢」を今も見ているのは日本だけである。勿論、この夢が実現できる見込みはない。にも拘らず、何故この事業は終わらないのか。これには政治が深く関わっている。プルトニウムは原爆の材料だからである。これまでラ・アークとセラフィールドで分離した日本のプルトニウムは長崎原爆6000発分に当たる。核兵器廃絶をうたいながら、裏では原爆原料を自国で作る核燃料サイクルを諦めないのは核保有の夢のためである。原料さえあれば今の日本の技術では半年で原爆製造が可能、と言われる。

「原爆と原発は双子の兄弟」はかつて筆者が属していた「反原発キノコの会」のうたい文句だった。

(2024年8月15日 河田)